盛岡支店

いわて食の大商談会でマッチングの場を創出

岩手県や地域の金融機関などと連携し「いわて食の大商談会2026」を開催しました。

本商談会は、岩手県内の魅力あふれる食材を国内外にアピールすることを目的に2011年から毎年開催しています。

会場には、県内の食品製造業者や農業者・漁業者105社が出展し、全国から訪れた卸売会社など246社、約500人のバイヤーに商品をPRしました。

昨年に引き続き海外のバイヤーも訪れ、盛況な会場の模様はテレビや新聞などでも取り上げられました。（6月16日）



積極的なPR活動が展開され、販路拡大の支援につながる商談会となりました

神戸支店

神戸大学の学生向け農林漁業金融セミナー

神戸大学で食料経済論を学ぶ約30人の学生向けに「農林漁業金融セミナー」を開催し、同大学卒業生を含む日本公庫職員が登壇しました。

セミナーでは、公庫の使命や役割の他、しょうゆメーカーと原料供給農家とのマッチング支援事例や、トマト生産法人の環境制御ハウス建設に係る民間金融機関との協調支援事例を紹介しました。

経済学研究科教授の衣笠智子氏からは「教科書では触れ難い実務の紹介は興味深く、学生にも良い刺激になった」との感想が寄せられました。

公庫は、教育分野との連携に今後も取り組みます。（6月22日）



有機原料と木桶仕込みにこだわるしょうゆメーカーへの融資事例について講義する公庫職員

福島支店

南相馬市で担い手育成支援農業学校で講義を実施

2024年4月に開校した南相馬市みらい農業学校で、学生13人に対し、出張講義を行いました。

講義では、「農業経営の始め方」「農業経営にまつわるお金の話」「事業計画を考える」の3テーマを中心に説明。講義後半は、グループワークで収支計画の作成演習に取り組みました。

参加した受講生からは、「実際に計画を作成してみて生産コストの高さを実感した」などの感想が寄せられました。

受講生たちは、卒業後、市内外で新規就農や農業法人へ就職する予定です。（8月18日）



グループで作成した収支計画を発表する受講生の皆さん

松山支店

県内の海面養殖業を応援養殖業交流会を開催

養殖業の盛んな宇和島市で「愛媛県養殖業交流会」を開催しました。養殖業者や金融機関職員など54人が参加しました。

交流会では、国立研究開発法人宇宙航空研究開発機構（JAXA）の桑原朋氏が、「今日から始める衛星データ利用！～愛媛の海を『見える化』してみたら～」と題して講演しました。参加者からは「衛星データの具体的な活用方法を教えていただき、非常に参考になった」などの声が寄せられました。

講演後の懇親会では、参加者間で活発な情報交換がなされました。（9月4日）



桑原氏には最新の衛星画像を用いて説明いただきました

みんなの広場

♠夏1号を拝読しました。「農と食の邂逅」に登場された株式会社カネイファームの専務取締役、矢野望美さんの農業経営の取り組みは、時代の先端を見据えたチャレンジ精神にあふれており、未来の農業のあるべき姿を先取りされているという点で、非常に印象に残りました。

農業と聞くと、手仕事が多く、従事される方もご高齢の方が少なくなく、生産効率や収益性に課題があるイメージがあるかもしれません。しかし、矢野さんは医療現場でのご経験を生かし、農業経営に新しい手法を導入されています。

例えば、給与計算や納品などの事務手続きのデジタル化、栽培記録へのタブレット導入にも踏み切られました。

人材育成に前向きに取り組まれている点も印象的でした。現場管理者が各部署の責任を持つ体制の構築や、外国人材の積極的な採用など、多様な人材が活躍できる職場づくりをされています。ITツールの積極的な導入を通じて、人材の育成、安定した継続雇用を実現する経営の手腕は素晴らしいと感じました。

また、日本の食料自給率は欧米諸国に比べて低い状況にありますが、私は、農業は国の安定に重要な役割を果たすと考えています。

矢野さんのような取り組みが国内の農業経営に広く普及すれば、日本の農業の現場に良い変化がもたらされるのではないかと期待しています。

（広島市　内悧）

次号予告
冬1号（1月発行）

花き産業の課題と展望（仮題）

２０２７年国際園芸博覧会を控え、花きへの関心が高まっている。花き産業は新たな需要が生まれる一方、担い手不足や気候変動などの課題も残る。品種・品目戦略や栽培技術の高度化、共同出荷、IT活用などを通じ産業の持続的発展に向けた方策を探る。

ご意見募集

今号はいかがでしたでしょうか。感想やご意見をお寄せください。FAX・メールなどで受け付けています。掲載させていただいた方には薄謝を進呈いたします。

FAX：03-3270-2350
メール：anjoho@jfc.go.jp

編集後記

フードテックというと、私たちは技術の「新しさ」に目を向けがちだ。しかし、今号の取材を通して、その価値は消費者のニーズに応えてこそ生まれるのだと実感した。そして、その土台には、長い時間をかけて受け継がれてきた歴史や文化がある。技術革新は、未来を追うだけでなく、人や社会を見つめ直すことから始まるのかもしれない。（清野）

近年は、フードテックの進展や健康志向の高まりなどを背景に、植物性食品や、代替たんぱく質などいわゆる「代替食品」を目にする機会が増えたように感じる。今号の取材後、とある「代替食品」を手に取って食してみると、従来型の食品と食感などが大差なく驚いた。今後の「代替食品」の進化が楽しみだ。（宮崎）

「新・農業人」のTOMUSHIは、全国各地のショッピングモールなどで、カブトムシやクワガタと触れ合える、子どもたちにとって夢のようなイベントを開催しています。会場にはSDGsを紹介するコーナーも設けられているそうで、かっこよくて環境にも優しいカブトムシに魅せられる子どもたちが、これからますます増えていきそうです。（黒川）

野菜の端材など、これまで捨てられてきたものに着目し価値を与えた「農と食の邂逅」のASTRA FOOD PLAN。同社の「タマネギぐるりこ」を器に盛ると、たちまちタマネギの香りが広がり、その芳醇さに驚きました。タマネギだけでなく果物など色々な食材で作れるのだとか――今後の可能性や広がりを感じた取材でした。（澤田）

AFC Forum フォーラム　2026.11　秋2号

■編集
小柳 典義　清野　健　宮崎 善幸
黒川 知洋　澤田 真理　山下 聡子
水谷 徳子

■編集協力
金子 弘道

■発行
株式会社日本政策金融公庫
農林水産事業本部
〒100-0004
東京都千代田区大手町1-9-4
大手町フィナンシャルシティ ノースタワー
Tel. 03(3270)2268
Fax. 03(3270)2350
E-mail　anjoho@jfc.go.jp

■印刷
株式会社DI Palette

＊本誌に掲載している記事、写真、図表、データなどをご利用になりたい場合は、事前に当社までご連絡ください。

国産にこだわり

農 と 食

AGRI FOOD

をつなぎます

国産農林水産物・食品の商談会

第14回 アグリフードEXPO 大阪2027

日時 2027年2月25日(木)・26日(金)

10:00-17:00　10:00-16:00

公式ホームページ

会場 ATC アジア太平洋トレードセンター

同時開催 大阪関西 第24回 シーフードショー大阪

主催： JFC 日本政策金融公庫